

文化の違いについて考える

4組 ワーリッウ

日本に留学することによ、てイソドネシア

と日本の文化の違いがよく分かるようになり

ました。このうのは、私は日本の文化に特に

詳しくなかつたからです。更に、イソドネシ

アでの常識が日本では必ずしも当てはまるとは限り

ません。時々私は日本人に変な顔をされ、取

ずかしい思いをしました。

私が日本へ来たのは三か月前のことです。

来日した際に空港に居る日本人の先生が私を

迎えに来ました。その時、私は言うまでもな

く自己紹介をして握手をしようと思、ていま

したがつ先生は微妙な顔をして握手をせず、

「よろしくおねがひします。」と言ひました。私

のホストファミリーや同じ寮に住んでゐる日

本人もそうです。日本人は握手に慣れてゐな

いらしいと思ひました。そこで、私は今日本

人と自己紹介する際、握手をしないうに注

意してゐます。

インドネシアの習慣では一般的に自己紹介を  
するたびに握手をします。なぜ握手をする  
かという点、これは相手に自分自身の存在を  
感じさせ、相手を尊重するわけですね。けれど  
も、日本ではお辞儀をして「よろしくおねが  
いします」で終わります。それだけでなく、  
インドネシアで礼を言う場合は相対的に下位  
にあるものが両手で相手の片手を握って、握  
手します。一方、日本では又お辞儀をします。  
しかも、感謝するの気持ちの強さはお辞儀の  
角度によります。違います。ですから、握手の習  
慣がある国から来た留学生の皆さん、「郷に  
入るとは郷に従え」という諺が示すとおり、  
風俗や習慣はその土地によります。違えますから、  
新しい土地に来たら、その土地の風俗や習慣  
に従うべきです。  
私はインドネシアで塾に行くと、日本語を  
学んだことがありません。私の先生は日本の文  
化について結構詳しく知っています。日本の伝統  
的な芸術から習慣まで知っています。ある日

私は先生に質問されました。「友達と雑談する場合、おなたはインドネシア人として、友達と向き合って座るか、隣に座るか、どこを選びますか。」インドネシア人の観点から、私は友達と隣に座る方を選びました。なぜかと言おうと、もし友達と向き合って座ったり、気まづくて違和感を感じます。具体的には友達の見線を見たりすわけにはいかないので、私達は友達と座る方はその反対で、向き合って座るほうを好みます。確かに日本では食堂や図書館などで日本人が隣に座って座るのを見たことがありません。ある日、私のインドネシア人の友達とは日本語会話を練習しようと思つて、日本人と二人で喫茶店まで行きました。着いたら、その喫茶店は隣に座る席しか残っていません。たので、向き合って座る席がある喫茶店を探すことになりました。さて、日本とインドネシアの文化には基本的に大きな差があります。それは「恥の文化」です。日本は戦前は「恥の文化」でした。

のに対し、戦後は「迷惑の文化」です。昔は、  
恥を知れ」と叱りました。今は、「人の迷惑  
ですよ」と叱りません。以前は、自らが自らを  
省けて恥じることか、なにかを問うのに対し、  
今は他人に迷惑をかかへては（け）な（）と教えます  
す。侍の時代には切腹と（）て、不始末が生  
じた場合にその責任を自ら判断し、自分自身  
で処置する覚悟を示すことで名誉を保つと（）  
た。社会的意味を持つた、自分の腹部を短刀  
で切り裂いて死ぬ自殺の方法がありました。  
これはもろろ昔のこと、今の日本にはこ  
んなことはありませんが、現代にも「恥の文  
化」は続（）て（）るのではな（）かと思（）います。  
そして、日本では他人に不快な思（）をさせて  
は（）けな（）ことを小さ（）ころから教わ、てき  
ました。  
日本と違（）てイソンドネシアでは規則を守ら  
な（）人が少なくありません。たとえば、列に  
並ぶ場合です。もし日本人がイソンドネシア人  
と同じ列に並ぶことにな、たら、き、と（）ら

いらするでし<sub>よ</sub>う。なぜならば、インドネシアでは恥がしからず、割り込も人が異常に多(い)です。その上、インドネシアでは汚職政治家のせいで貧しい国民が増えつつあります。それでも、ち<sub>っ</sub>とも恥じることはありません。インドネシアの人々は日本の習慣を積極的に見習う必要が有ると思(い)ます。ですから、私(私)はインドネシアの人々に礼節を重んじ、自らの行動に責任を持ち、てほし(い)と思(い)ます。私(私)は国の成功は社会の規範次第だと信じています。

恥の文化は今の日本に影響を与えていきます。先進国として日本は高度な技術を持(て)ていますが、国民の行(い)も良(い)というところで、私(私)は自分の国を軽視するわけではありませんし、日本を過大評価するわけでもありません。ま<sub>き</sub>、とそれぞれに長所と短所があると思(い)ます。しかし、ほかの国の長所を正しく評価し、自分の国に生かすことは、自分の国を成功に導くために必要なことだと思(い)

